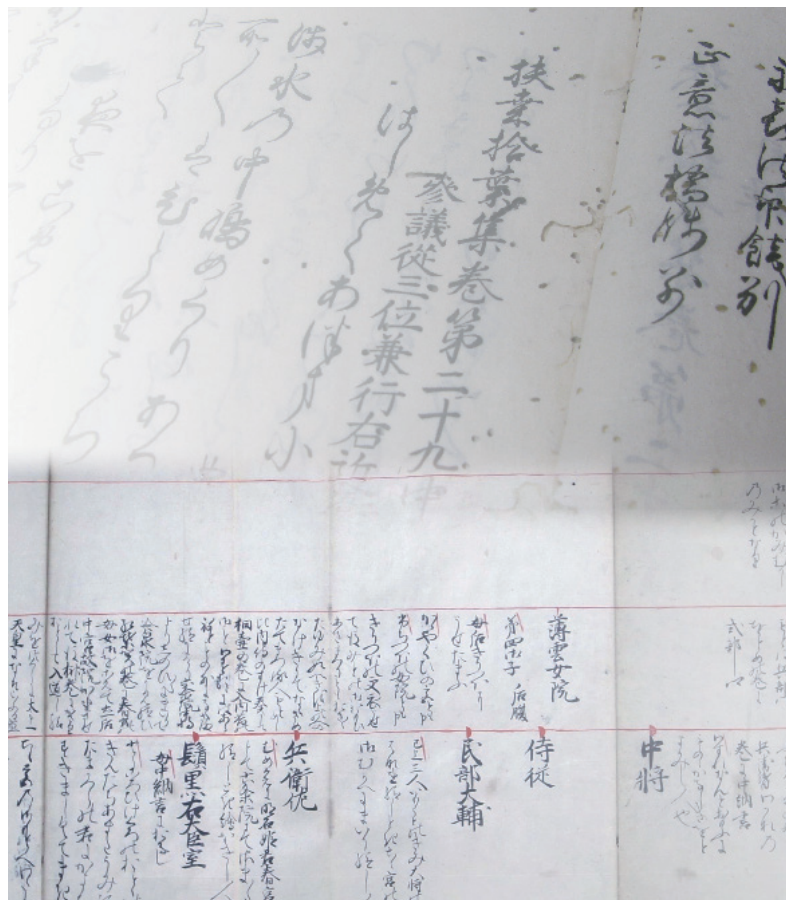


見る・読む・比べる IV

—ドキュメンテーション学科による古典籍へのアプローチ—



期間：平成23年10月27日（木）～11月16日（水）

鶴見大学図書館

ごあいさつ

鶴見大学文学部ドキュメンテーション学科による4回目の展示です。「古写本演習」「古版本演習」をはじめとする専門科目で、学生の皆さんが実際に手に取って調査した古典籍類を中心に展示しています。

解説執筆には学生の一部も参加しました(担当項目に記名しています)。それ以外の解説については、書写資料は久保木が、印刷資料は伊倉が担当しました。古典籍類を丹念に調べる楽しさを、ぜひとも感じ取っていただければ幸いです。
(伊倉史人・久保木秀夫)

展示書目

*は個人研究室蔵

[I] 装訂いろいろ

- 1 卷子本かんすぼん：和漢朗詠集わかんろうえいしゅう 伝後京極良経筆 鎌倉時代前期写 2軸 横浜市指定文化財
- 2 折本おりほん：源氏物語系図 室町時代末期写 1帖
- 3 粘葉装でっしょうそう：壁草注かべくさちゅう 伝宗全筆 室町時代後期写 1帖
- 4 列帖装れつちようそう(綴葉装てっちようそう)：新勅撰和歌集しんちよくせんわかしゅう 伝後伏見院筆 鎌倉時代末期写 1帖
- 5 列帖装(綴葉装)：源氏物語 須磨巻 伝二条為定筆 南北朝時代写 1帖
- 6 折紙列帖装おりがみれつちようそう：源氏物語 濡標巻みおつくし 室町時代後期写 1帖
- 7 袋綴ふくろとじ：平家物語 室町時代末期写 2冊
- 8 包背装：源氏物語 江戸時代初期写 33冊
- 9 大和綴やまととじ：三島千句 伝宗祇筆 室町時代後期写 1冊

[II] 古写本の分割と改装

- 10 元卷子本にじっかんぼん：二十卷本類聚歌合いじゅうたあわせ 二条殿切にじょうどのぎれ 伝藤原俊忠筆 平安時代末期写 軸装1幅
- 11 元粘葉装かなかんおりようじゆきよう：仮名観無量寿経 断簡 伝後京極良経筆 鎌倉時代前期写 軸装1幅
- 12 元列帖装：万葉集 金沢文庫切 伝尊円親王筆 鎌倉時代後期写 軸装1幅
- 13 元列帖装か：源氏物語 薄雲巻 断簡 伝藤原為家筆 鎌倉時代中期写 軸装1幅
- 14 元冊子本・卷子本改装げんかほうししゅう：元可法師集 伝清水谷実秋筆 室町時代前期写 1軸
- 15 折帖おりじよう：古筆手鑑こひつてかがみ 1帖

[III] 江戸時代の叢書

- 16 集古十種 寛政13年(1801)刊 松平定信編
ア 肖像五「空也上人木像」
イ 肖像三「藤原定家像」
ウ 銅器三「松平定信蔵乾統鐘」
- 17 扶桑拾葉集 元禄2年(1689)刊 徳川光圀編 *
ア 目録 イ 卷二十二 ウ 卷二十六
- 18 群書類従・続群書類従 江戸後期刊 塙保己一篇
ア 目録(大本) イ 目録(小本) ウ 続羣書類従稿本 卷599・600・601〔江戸末〕写
- 19 丹鶴叢書 弘化4年(1847)～嘉永6年(1853)刊 水野忠央編
ア 古事談(癸丑帙) 嘉永6年(1853)刊 勝海舟旧蔵
イ 蒙古襲来絵詞(己酉帙) 嘉永2年(1849)刊
ウ 日本書紀(辛亥帙) 嘉永4年(1851)刊
エ のびね物語(庚戌帙) 嘉永3年(1850)刊 校正刷
オ 千とせのためし『丹鶴叢書』外集 嘉永4年(1851)刊
参考 貞観年中行事〔江戸末〕写「新宮城書蔵」印

[I] 装訂いろいろ

装訂とは、書物の仕立て方のことです。書物の装訂の歴史は卷子本から始まりました。いわゆる^{まきもの}巻物ですが、この装訂は"読む"という行為にはあまり適していません。読みたいところを瞬時に開くことができませんし、読み終えたら巻き戻さなければならないのが非常に手間です。そこで次に折本という装訂が生まれました。これは卷子本を折りたたみ、前後に別々の表紙を付けたもので、みごとに卷子本の弱点を克服しました。現代で言えば、お経などがこの装訂にあたります。

折本からやがて^{せんぷうよう}旋風葉という装訂が生まれました。折本の前後の表紙を紙や布で連続させたもので、そこには冊子本の萌芽がみられます。

その冊子本ですが、これには主に粘葉装と列帖装（綴葉装とも）、袋綴などがあります。粘葉装は紙をふたつ折りにし、折り目の外側をのりてつなぎ合わせたものです。列帖装は重ねた紙をふたつ折りにし、さらにそれを重ねて折り目を糸で綴じたものです。日本では平安時代から用いられ始めたとされています。現代のノートに近い綴じ方です。袋綴は1枚ずつふたつ折りにした紙を、折り目の反対側で糸綴じたものです。

このように古典籍には、さまざまな装訂が用いられています。今回の展示では、本学図書館蔵の貴重書の中から、代表的な装訂、比較的珍しい装訂のものを選んでみました。（4年 小林則仁）

1 卷子本：和漢朗詠集 伝後京極良経筆 鎌倉時代前期写 2軸 横浜市指定文化財

卷子本は、横長の料紙を1紙ずつ横につなぎ合わせたものに、一番後ろの料紙の端に軸をつけ、巻いて表紙をつけてくるんだ装訂です。

和漢朗詠集は、鎌倉時代前期頃に書写された卷子本です。1紙は縦30.3cmで、上巻の横平均は48cm、下巻の横平均は51cmです。ただし、上巻のはじめの料紙だけは45.5cmで、上巻の平均よりも2.5cmほど短くなっています。下巻には内題（字幅2cmほど）がありますが、上巻には内題がありません。これは、上巻の初めの料紙に書かれていた内題が、劣化によって切り取られた為であるかとも推測されます。

なお、料紙には上下巻とも、天地（上下）に1本ずつの界線があります。界高は25.7cmです。

表紙は布表紙で、山吹茶色に金糸で梅の木が織り込まれており、見返しは金銀切箔砂子散らし模様になっています。鎌倉時代の表紙にしては保存状態が新しく、後から取り付けられたものであると考えられます。

漆塗りの箱をさらに桐の箱に収めた二重箱になっており、丁寧に扱われています。（3年 平山実奈・早川友絵）

2 折本：源氏物語系図 室町時代末期写 1帖

折本は、卷子本と同様に、横長の料紙の端同士を糊づけしてつなげた上で、等間隔で谷折り、山折りを繰り返して折りたたみ、前後に表紙を取り付けた装訂です。1帖、2帖と数えます。仏教聖典などで多く見られます。卷子本と比べて閲覧に便利ですが、折り目が切れやすいという欠点もあります。

源氏物語系図は、縦31.8cm×横14.6cmの大型の折本です。表紙は金銀糸による市松文様織り出し、見返しは金銀揉箔散らしと、金や銀を使った豪華な装訂です。全52丁。源氏物語の登場人物を系図の形式で紹介したものです。記載の中には、現代に伝わる源氏物語には登場しない「巢守巻」の登場人物も含まれています。

全丁に渡って4本の朱色の界線が内容に応じて引かれています。また、界線が引かれていないところをよく観察すると、界線を引くための薄い線が空押しされているのが確認できます。（3年 神谷洋輔）

3 粘葉装：壁草注 伝宗全筆 室町時代後期写 1帖

粘葉装は、横長の料紙を縦にふたつ折りにして、折り目の外側に糊を付けて重ねていき本にするという装訂です。見開きの状態で丁が浮いた姿が蝶のように見えることから、^{こちょうそう}胡蝶装とも呼ばれています。粘葉装は装訂が簡単で紙の量の調節も自由ですが、糊代の部分^{のりしろ}が傷みやすいのが欠点です。

壁草注は、縦19.0cm×横14.5cmの粘葉装です。全74丁。やはりこの本も糊付け部分に虫喰いが多くあり、紙で補修されています。そのため本の状態としてはあまり良くありません。裏表紙の見返しに「牡丹花弟子宗全」とい

う極札が貼られています。「牡丹花」は牡丹花^{ぼたんかしやうはく}肖柏で、その弟子宗全^{そうぜん}が筆者だったと伝えています。本当に宗全の筆跡かどうかはわかりません。この本を納めている帙題には「永正大永頃」(1504～1528)の写本、とあります。
(3年 上出真大)

4 列帖装(綴葉装):新勅撰和歌集 伝後伏見院筆 鎌倉時代末期写 1帖

列帖装は、横長の紙を何枚か重ねて折り、その1括りを複数重ね、それらを糸で綴じ合わせた装訂です。綴葉装とも言います。

新勅撰和歌集は、縦23.6cm×15.4cmの列帖装です。料紙や筆跡の特徴から、鎌倉時代末期の写本とみられます。箱書(はこがき)には「新勅撰 上 後伏見院筆」と記されており、後伏見天皇が書写した本だと伝えられています。「上」と記されていることから、また内容的にも、下帖が存在したと推測されますが、残念ながら、鶴見大学図書館には上帖しか所蔵されていません。また、上帖には奥書がありません。

表紙には金糸で雲が織り出されており、更に、見返しには銀箔が散りばめられている、大変きらびやかな本です。本を写した際に、乾き切らなかった字が反対側の丁にうつってしまった痕跡が多数見られます。(3年 根岸治実)

5 列帖装(綴葉装):源氏物語 須磨巻 伝二条為定筆 南北朝時代写 1帖

この源氏物語・須磨巻も、新勅撰和歌集と同様に列帖装です。縦16.0cm×横15.0cm、全62丁。箱書に「二条家為定卿筆/須磨巻/新式抄/外題冷泉殿筆」とあり、二条為定が書写した本と伝えられています。「冷泉殿」は未詳です。料紙や筆跡の特徴から、南北朝時代頃の写本とみられます。須磨巻の後の余った丁を使って「新式抄拔書」が書写されています。

破損や疲れ、虫喰い、汚れなどがあり、保存状態はあまり良くありませんが、綴じ糸が切れて二つに分かれてしまっている為、かえて列帖装の装訂の状態がよくわかります。

表紙は草花模様の利休色で、見返しには金銀箔が散りばめられており、とても豪華に仕立てられた写本です。

(3年 木村幸代)

6 折紙列帖装:源氏物語 濡標巻 室町時代後期写 1帖

折紙列帖装は、料紙をまず横に2つ折りにし、折り目を下側に向け、あとは列帖装と同じように料紙・括りを重ねて行って本にする、という装訂です。多くの場合、両面書写には向かないような、薄手の料紙が用いられます。

源氏物語・濡標巻は、縦19.1cm×横13.2cmの折紙列帖装です。室町時代後期頃の写本で、この巻だけが残っています。見開き中央の、左右の面の境目(ノド)に、6つの綴じ穴痕がありますので、とある時期に改装され、綴じ穴が開け直されたことがわかります。左面の左余白中央にある漢数字は、何丁目かを示す^{ちやうづけ}丁付です。本文とは筆跡が異なるようですので、あとから書き入れられたものなのでしょう。

なお、源氏物語の本文は、いわゆる^{あおびやうしほん}青表紙本と^{かわちほん}河内本とに大別されますが、この本は、そのいずれにも属さない、とても珍しい本文を備えており、学界において重要視されています。

7 袋綴:平家物語 室町時代末期写 2冊

袋綴は、縦にふたつ折りした料紙を何枚も重ね、前と後とに表紙を加え、折り目とは反対側を糸で綴じて本にする、という装訂です。料紙1枚ずつが袋状になることからの名称です。

平家物語は、縦27.7cm×横21.7cmの、堂々たる袋綴本です。料紙や筆跡の特徴から、室町時代末期頃の写本とみられます。本来は10数冊あったはずですが、今は巻1～2の2冊が伝わっているだけです。本文とは別の筆者によって、振り仮名などの書き入れがされているのも、この本の特徴のひとつです。

8 包背装:源氏物語 江戸時代初期写 33冊

包背装は、袋綴を下綴じたあとに、オモテ・背・ウラを1枚の紙でくるんで糊付けし、表紙としたものです。通常の袋綴と異なり、下綴じの紙^{こま}縫り以外に、糸は用いられていません。

この源氏物語は、縦25.6cm×横18.9cmの包背装です。54巻が33冊に書写されています。江戸時代ごく初期頃

の写本とみられます。深い藍色の表紙には、よく見ると、蓮華唐草文様が摺り出されています。表紙中央には、金銀泥で海草や貝などが描かれた豪華な題簽が貼られ、各冊所収の巻名が記されています。展示の1冊には「にほふ宮 竹川／こうはい」（匂宮・竹河・紅梅）とあります。

淀藩稲葉家旧蔵と伝えられていますが、確証はないようです。

9 大和綴（やまととじ）：三島千句 伝宗祇筆 室町時代後期写 1冊

大和綴は、表紙を綴じる際に、太めの装飾的な糸や紐を用いて目立つようにした装訂です。

この三島千句は、縦23.0cm×横19.4cmの袋綴1冊本に、金糸で瑞雲文様を織り出した布表紙を付け足し、あとから大和綴としたものです。大和綴は通常、結び目をオモテ表紙の側に出しますが、この本ではウラ表紙の側に出ているのも特徴的です。

なお、結び目をお目にかけるため、中を開けないのが残念ですが、この本には「明応五年二月廿七日写之」「宗祇（花押）」という奥書があります。ただし連歌師宗祇の自筆本とまでは言えないようで、花押（昔のサインです）を含め、明応5年（1496）より少しあとの転写本かとみられます。

〔Ⅱ〕古写本の分割と改装

ほぼ室町時代頃までに書写された古写本は、やがてその筆跡や筆者、料紙などに美術的価値が見出されていくようになり、結果、江戸時代を中心に、次々と分割され、収集家・愛好家たちの手に渡っていくことになりました。それら分割された古写本の断簡を、古筆切と呼んでいます。古筆切は、豪華な掛け軸に仕立てられたり、古筆手鑑というアルバムに貼られたりしながら、大事に伝えられてきました。

ところで、これら古筆切は、本来は書物だったわけですから、中には装訂の痕跡を留めていたりするものがあります。あるいは、ほかの資料と突き合わせることによって、装訂の種類を特定・推定できたりするものもあります。また、分割したあとの残欠本を改装して、あらためて本の状態に仕立て直したものもあります。今回は、そうした特徴を持った古筆切や残欠本を選び、展示してみました。装訂や改装の痕跡がどこにあるのか、ぜひとも展示品を熟覧・注視してみてください。

10 元卷子本：二十巻本類聚歌合 ^{にじょうどのぎれ} 二条殿切 伝藤原俊忠筆 平安時代末期写 軸装1幅

二十巻本類聚歌合は、平安時代末期に編纂された歌合集です。それまでに催されていた多数の歌合を集成し、主催者の身分別・時代順に分類整理して、20巻の卷子本に書写したものです。原本が、長らく近衛家に秘蔵され続けていましたが、江戸時代に、20巻のうちのかかなりの巻が分割され、古筆切として世間に流出していきました。ただし、近衛家歴代の宝物を収める陽明文庫には、現在も10数巻分が、卷子本の形態をとどめたまま現存しており、国宝に指定されています（そのいずれにも分割された形跡があります）。ちなみに、東京都立川市の国文学研究資料館において現在、それら陽明文庫本の実物が展示されています（12月4日まで）。この機会に、併せてぜひともご覧下さい。

さてこの1葉は、陽明文庫本のツレであり、すなわち二十巻本類聚歌合の一部分です。伝称筆者は藤原俊忠。一般に二条殿切（もしくは二条切）と呼ばれています。陽明文庫本から切り出されたものなので、明らかにもと卷子本だったということになります。縦26.0cm×横15.6cm。また薄墨で界線と罫線が引かれています。界高22.4cm、罫幅2.8cm。罫線を基準に数えていくと、全部で6行ありますが、うち1～4行目は、巻4所収の寛平5年（893）以前開催・寛平御時后宮歌合の一部分、また5～6行目は巻13所収の天元4年（981）開催・故右衛門督齊敏君達謎合の一部分、となっています。つまり本来は別々の巻に書かれていた、別々の歌合をつなぎ合わせ、一続きの古筆切のように見せかけているのです。これを呼び継ぎと言います。

なお、よく観察しますと、1行目と2行目の間にも紙継ぎの痕が見出されますが、4・5行目の場合と異なり、紙継ぎの上に文字がのっていますので、こちらは卷子本の本来の、装訂時の紙継ぎであると考えられます。もちろん内容的にもきちんと連続しています。

ちなみに、陽明文庫本の中には、紙背に「財」という朱印が捺され、それがオモテ面から透けて見えているものがあります。一方、この1葉の2～3行目あたりの下方（特に3行目一番下の「き」のあたり）にも、かすかに朱色の痕跡がみられますので、陽明文庫本と同様に、本来はこの1葉の紙背にも「財」印が捺されていたかと推察されます。

11 元粘葉装：^{かなかんむりようじゆきよう}仮名観無量寿経 断簡 伝後京極良経筆 鎌倉時代前期写 軸装1幅

観無量寿経を訓読し、平仮名交じり・片仮名ルビ付きで書写したものです。伝称筆者は藤原良経。鎌倉時代前期頃の写。縦25.6cm×横9.9cm。またよく観察しますと、界線と罫線が空押しされているのがわかります。界高21.1cm、罫幅2・3cm。

料紙右端のルビが一部分欠けていますので、ここで裁断されており、本来はもっと行数があったかのように見えます。しかし同じ典籍から切り出されたツレ（『古筆学大成』などに図版が掲載されています）を確認していきまると、1面に4行以上書写されたものは見つかりません。従っておそらくは本来的に1面4行の、縦長の冊子本だったのだろうと推定されます。また、ツレの中には糊代痕らしきものも確認できますので、もともとの装訂は粘葉装だった可能性が高そうです。この1葉の右端が欠けているのは、その糊代痕を含む余白を切り落としたことによるのではないのでしょうか。

12 元列帖装：万葉集 金沢文庫切 伝尊円親王筆 鎌倉時代後期写 軸装1幅

尊円親王を伝称筆者とする万葉集の断簡です。この写本では、万葉仮名に片仮名ルビを振る形で、その歌の訓が示されています。

縦31.4cm×横8.2cm。よく観察しますと、天地に1本ずつ、金泥で界線が引かれていることがわかります。界高27.1cm。世に「金沢文庫切」と呼ばれている名物切ですが、本当に、鎌倉時代・^{さねとき}北条実時創建の金沢文庫に由来する写本だったのかは、必ずしも明らかではありません。

かなり大型の写本で、一見、もと卷子本だったようにも判断されてしまいます。しかし、冷泉家時雨亭文庫蔵の古典籍群の中に、この金沢文庫本のツレが、典籍の状態のまま残っており、それによって本来は列帖装だったことが明らかになっています。

13 元列帖装か：源氏物語 薄雲巻 断簡 伝藤原為家筆 鎌倉時代中期写 軸装1幅

縦32.9cm×26.4cmという特大の写本です。一般に藤原為家を伝称筆者とするもので、鎌倉時代中期頃の書写とみられます。源氏物語のいわゆる河内本の最古写資料として、近年特に注目を集めています。ツレや、ツレとまでは言えないにしても関連しそうな古筆切が、次々と発見・紹介されてきています。

この1葉も、その大きさから、もと卷子本だったようにも見えてしまいますが、料紙の左右両端に余白があること、丁をめぐった時の手擦れの痕が左下に認められること、そして何より右端に4つの綴じ穴痕が存することから、もと冊子本だったことは確実です。ただし、具体的にどんな装訂だったのかを特定するのは、必ずしも容易ではありません。本来は列帖装で、その補強のために4つの綴じ穴を開け、大和綴じのようにしたものでしょうか。あるいは、横長の料紙をふたつ折にするのではなく、縦中央で2分割した上で、料紙を重ね、右端に穴を開けて糸で綴じた、いわゆる^{たんようそう}単葉装だった可能性もあり得るでしょうか（ちなみに^{せんじゆじ}専修寺蔵の水鏡は、ほぼ同時代・同寸法の写本ですが、複製本を見る限り、この単葉装になっています）。関連資料を精査しながら、丹念に調べていく必要がありそうです。

14 元冊子本・卷子本改装：元可法師集 伝清水谷実秋筆 室町時代前期写 1軸

縦23.2cm×横全長約800cmの卷子本です。表紙は布製で、藍色地に金で草花の模様が織り込まれています。元可法師集は、元可という南北朝時代の僧侶の個人歌集（私家集）です。この本は、室町時代前期頃に書写されたものです。

料紙に、丁を繰ったと思われる手擦れの痕があり、さらに綴じ穴の痕もあることなどから、この本はかつては、卷子本ではなく冊子本だったということがわかります。卷子本と冊子本とでは虫喰いや破損の状態が違うのですが、

この本にはその2種類両方の痕があることなども証拠となります。

卷子本は最も古い装訂とされており、ゆえに書物の中では最も格式高いものとして扱われています。そのためかつて、冊子本を豪華版・愛蔵版として卷子本に改装することがしばしば行われていました。この本もその類であると考えられます。(4年 小林則仁)

15 おりじょう こひつてかがみ 折帖：古筆手鑑 1帖

古筆手鑑は、折帖に何種類もの古筆切を貼付した、いわば古筆切のアルバムです。折帖のオモテ・ウラ両面に何百葉も貼っているものもあれば、数葉～数十葉程度というものもあります。

この古筆手鑑は、縦28.6cm×横24.9cmの折帖で、オモテ面のみに13葉の古筆切が貼られています。比較的近年に誂えられたもののようです。規模としては小振りですが、鎌倉時代の古筆切なども見出され、なかなか充実した内容になっています。各面が金箔で縁取られているのも、見栄えがします。

各古筆切の隣に添えられているのは、主に江戸時代の鑑定家たちによる、筆者についての鑑定書です。筆者名とその古筆切の冒頭数文字が、縦長の料紙に書かれ、かつ印が捺されているものを極札、やや粗末な料紙にやや粗雑な筆蹟で書かれているものを正筆箋しょうひつせんと呼んでいます。この手鑑では、オモテ面に貼り切れなかった極札や正筆箋を、折帖のウラ面に貼っている場合もあります。

[Ⅲ] 江戸時代の叢書

「叢」には「むらがる・あつまる」(聚)「すべての・雑多な」(総)という意味があります。ですから「叢書」とは「あつめられた書物」「すべての書物」のことを言います。あらゆる時代の、様々な人たちが書き残した群書を輯録したものが「叢書」です。今回の展示では、古代より伝わる書物や文物を労力・財力を惜しまず蒐集し、後代に伝えようとした江戸時代の四人の賢人たちによる叢書を展示します。

16 集古十種 寛政13年(1802)刊 松平定信編

寛政の改革を行った白河藩第三代藩主、江戸幕府老中首座松平定信(1759-1829)が編纂した叢書です。日本各地に伝わる古器物・古書画を碑銘、鐘銘、兵器(甲冑・旌旗類、弓矢、刀剣、馬具)、銅器、楽器、文房、印章、扁額、肖像、書画の十種(全85冊)に分類し、所在地、材質、寸法、その他特徴を注記してあります。古器物・古書画の調査、模写には八代弘賢、谷文晁、白雲等がその任に当たりました。

掲載された古器物・古書画には、現存するものも多く、「古画肖像 五」所掲「空也上人木像」(16-ア)は京都六波羅蜜寺に伝わって有名です。「古画肖像 三」に載せる「藤原定家像」(16-イ)は京都冷泉家に原本が伝わっていますが、「或曰冷泉家蔵」とありますので、原本は見ずに模写本をさらに写したものかもしれません。定信は自らも古物を集めることを好み(古瓦をたくさん持っていたことはよく知られていたようで、現在の福島県飯坂温泉あたりを訪れた際にも近隣の者から古瓦を献上されたそうです)「銅器 三」の「乾統鐘」(朝鮮鐘)(16-ウ)も定信の所持していたものです。この鐘は現在東京都足立区の西新井大師総持寺(真言宗)の宝物となっています。

『集古十種』は明治期まで何度か刷られ、今もその版木1451枚は三重県桑名市の鎮国守国神社に残されています(重要文化財)。

なお、続編として古画を調査、模写した『古画類聚』が編纂されましたが、こちらは刊行されず、写本原本が東京国立博物館に伝わっています。

17 扶桑拾葉集 元禄2年(1689)刊 徳川光圀編 30巻、序・上表・目録一卷、作者系図一卷

水戸黄門として知られる水戸藩第二代藩主徳川光圀(1628-1701)が編纂した叢書です。光圀の編纂したものでは歴史書『大日本史』がよく知られていますが、その編纂の過程で集められた和文資料をまとめたものが本書です。題号は後西上皇より下賜され、序文は上皇の第2皇子有栖川宮幸仁親王が執筆しました。光圀の上表文には「先正の嘉言は泥砂に等しくして棄擲」され「往哲の懿行(善行の意)は沈埋して彰はれざる」ことを惜しんで編纂を志

したと語られています。奈良時代から江戸初期までの序文、跋文、記録、日記、紀行、賛などの仮名文が313点がほぼ年代順、作者別に納められています。本叢書に収録された作品の中には希書や善本も少なくありません。巻22(17-イ)の正徹「なくさめ草」は希書の類に入るでしょう。また、『群書類従』『続群書類従』に与えた影響も大きく、同書や巻26(17-ウ)の「嵯峨記」「唐崎の松の記」「夢想記」は『群書類従』の巻481の底本、校合本として利用されています。

本書には「栗田氏蔵」の朱印が捺されていますが、幕末の水戸藩に仕え、『大日本史』の執筆にも携わった学者栗田寛(1835-1899)の旧蔵書と思われる。

18 群書類従・続群書類従 江戸後期刊 塙保己一篇

盲目の学者、総検校学者塙保己一(1746-1821)の編纂した叢書です。天明6年(1786)年に見本『今物語』を刊行し、全巻の刊行を終えたのは文政2年(1819)のことです。530巻666冊からなり、古代から江戸時代までの文学作品、史料等およそ1270点を25部に分類し収めています。今回の展示は目録だけですが、『群書類従目録』(18-イ)は持ち歩きしやすくした小本で伝本は稀少です。本書は元東京帝国図書館(現国立国会図書館)館長、元鶴見大学図書館長の故岡田温氏(文学部岡田靖教授の御尊父)の旧蔵書です。

目の不自由だった保己一が、いかにして『群書類従』刊行という偉業を成し遂げたかは、『今に生きる塙保己一：盲目の大学者に学ぶ』(堺正一、埼玉新聞社、2003、289.1/H)や『塙保己一の生涯』(市村宏、日本書院、1946、121.27/H)等の一読をおすすめします。

なお、『群書類従』の版木(重要文化財)は東京都渋谷区の温故学会塙保己一史料館に大切に保存・管理され、現在でも刷り立てが行われています。

保己一は『群書類従』刊行の後も続編1000巻の刊行を企図しましたが、計画の途中で保己一は没し、息子の忠宝^{ただとみ}が事業を引き継ぐことになりました。忠宝は目録二冊と巻107、470、884、954を刊行しましたが、幕命を受けて廃帝の典故の調査をしていると誤解され、倒幕・尊皇派の浪士ら(後にその浪士の1人は初代総理大臣伊藤博文だったことが判明しています)に命を奪われてしまいました。その後、保己一の孫忠韶^{ただつぐ}が1000巻の目録に合う書目の収集・校訂・清書作業に尽力しましたが、ついに刊行には至りませんでした。

忠韶の収集した資料や清書本は宮内庁書陵部等に伝わっていますが、なかには民間に流出してしまった資料や校訂本もあります。展示の『続群書類従』(18-ウ)もそうした一冊です。『続群書類従』巻599・600・601の校訂本で「伊勢峯軍記」「牛窪記」「今川家譜」が収められています。

19 丹鶴叢書 弘化4年(1847)～嘉永6年(1853)刊 水野忠央編

紀伊新宮藩の第9代藩主水野忠央^{ただなか}(1814-1865)が編纂した叢書です。丹鶴とは忠央の号です。紀伊徳川家付家老として藩主慶福(後の14代將軍家茂)を補佐しました。文事を好み、蔵書家としても知られ(参考資料にあげた「貞観年中行事」は忠央の旧蔵書です)、本書の刊行を企てました。当初は1000巻の刊行を目指したとも言われますが、弘化4年(1847)から嘉永6年(1853)にかけて174冊を世に出すにとどまっています。編纂は藩校督学の山田常典を主催とし、小中村清矩や黒川真頼らが当たりました。本書はその彫刻・摺刷の優美さで知られていますが、少数部数の刊行だったようで、現存する伝本は限られています。

展示の「古事談」(19-ア)は「勝安芳」の印が捺されています。勝海舟の旧蔵本です。「蒙古襲来絵詞」(19-イ)の原本は当時肥後の大矢野家に秘蔵されていたものですが(現三の丸尚蔵館蔵)、常典に派遣された絵師高島千春が同書の閲覧を許可され、終日凝視した後、宿に戻り写すということをしりかえし、遂には模写を完成させたというものです。「日本書紀」(19-ウ)は嘉元4年(1306)の古写本を朱の書入、虫損の跡まで忠実に模刻したものです。「しのびね物語」(19-エ)は校正刷で、朱で本文を訂正した箇所があります。ノドの部分には刻工名(版木を彫った人物)の印が捺されています。また巻末には常典の花押も見ることができます。「千とせのためし」(19-オ)は『丹鶴叢書』の外編として刊行されたものの1つで、古筆切、古鏡等が多色刷りされており見事です。

明治になり、徳富蘇峰(1863-1957、徳富蘆花兄、ジャーナリスト、政治家)は古書店にうち捨てられていた「日本書紀」(19-ウ)の版木を見つけ出し、成賞堂叢書の1冊として民友社から刊行しました。